

令和5年度の事業報告書

令和5年4月1日から令和6年3月31日まで

特定非営利活動法人光量子医学推進機構

1 事業の成果

- ・CST開催を補助することで関係者の技術・知識向上に貢献し、ホームページや新聞記事掲載を通じて一般市民への事業の認知拡大に努めた。
- ・子育て家庭を対象とした食材無料配布会など、子どもの居場所づくりなど、地域の社会福祉に貢献した。
- ・ウクライナ避難民に対する健康サポート事業を行い、世界の社会福祉に貢献した。

2 事業の実施に関する事項

(1) 特定非営利活動に係る事業

事業名 (定款に記載した事業)	具体的な事業内容	(A)当該事業の実施日時 (B)当該事業の実施場所 (C)従事者の人数	(D)受益対象者の範囲 (E)人数	事業費の金額(単位:千円)
①カダバーサージカルトレーニングなど医療技術向上に関する支援事業	・浜松医科大学にて開催されるカダバーサージカルトレーニングの運営補助	(A)令和5年11月～3月7回 (11月～3月) (B)浜松医科大学解剖学実習室 (C)35人	(D)国内の医師、研究者 (E)113人	24
②子育て家庭支援や子どもの教育など地域の福祉に関する事業	・子育て家庭を対象とした食材無料配布	(A)年2回(6月、2月) (B)浜松市三ヶ日町研修施設、浜松市三ヶ日町大崎自治会館 (C)9人	(D)静岡県西部の子育て家庭 (E)375人(子ども人数、196家庭)	1070
	・子どもの居場所づくり事業(学習支援)	(A)通年 (B)浜松市三ヶ日町研修施設 (C)2人	(D)静岡県西部の子育て家庭 (E)12人	
③研修会の開催など全世代を対象とした健康増進に関する事業	・三ヶ日町地域福祉活動	(A)8月～毎第4土曜日(計8回) (B)三ヶ日町大崎自治会館 (C)7人	(D)大崎地区の住民 (E)187人	446
	・三ヶ日研修施設研究会	(A)3月26日 (B)三ヶ日研修施設 (C)7人	(D)国内外の一般市民、研究者および学生 (E)51人	

④発展途上国支援や難民支援など世界の福祉に関する事業	・ウクライナ避難民を対象とした健康サポート事業。11件の相談事例に対応。	(A)4月1日～3月31日 (B)オンライン、団体事務局 (C)4人	(D)日本国内のウクライナ避難民 (E)約2,300人 ※2023年4月	113
⑤その他 この法人の目的を達成するための事業	・本事業年度は、未実施	-	-	-
支出合計				1653

(2) その他の事業

事業名 (定款に記載した事業)	具体的な事業内容	(A)当該事業の実施日時 (B)当該事業の実施場所 (C)従事者の人数	事業費の金額(単位:千円)
その他の事業	・本事業年度は、未実施	-	-
			0

① カダバーサージカルトレーニングなど医療技術向上に関する支援事業

実施回数：7回

開催場所：浜松医科大学講義実習棟解剖学実習室（献体処置室）

運営形態：浜松医科大学からの依頼を受けた CST 実施補助

本年度は講義実習棟改修工事のため、献体処置室にて使用献体を1~2体に制限した縮小開催となった。7団体により計8日間の研修が開催された。

開催年月日	セミナー名	参加者数
2023/11/12	乳腺外科領域手術（乳房切除、腋窩郭清）についての手技研修 主催：浜松医科大学外科学第一講座（乳腺外科）	11
2023/12/17	消化器外科領域の内視鏡外科手術（胸腔鏡、縦隔鏡、腹腔鏡など）についての手術実習 主催：浜松医科大学外科学第二講座	9
2023/12/23	CSTによる形成外科手技の習得 主催：浜松医科大学形成外科	10
2024/1/20	神経ブロックトレーニング及び頸部・背部・臀部周囲構造についての解剖実習 主催：浜松医科大学麻酔・蘇生学講座	26
2024/2/12	鼠径部ヘルニアに関する神経の解剖と腹腔鏡下離断術 主催：浜松医科大学外科学第一講座（一般外科）	14
2024/2/17	婦人科手術における深部骨盤解剖実習 主催：浜松医科大学産婦人科学講座	13
2024/3/2-3/3	整形外科学手術アプローチ、手技トレーニング 新たな術式、機材の開発 主催：浜松医科大学整形外科学講座	30
	参加者計	113



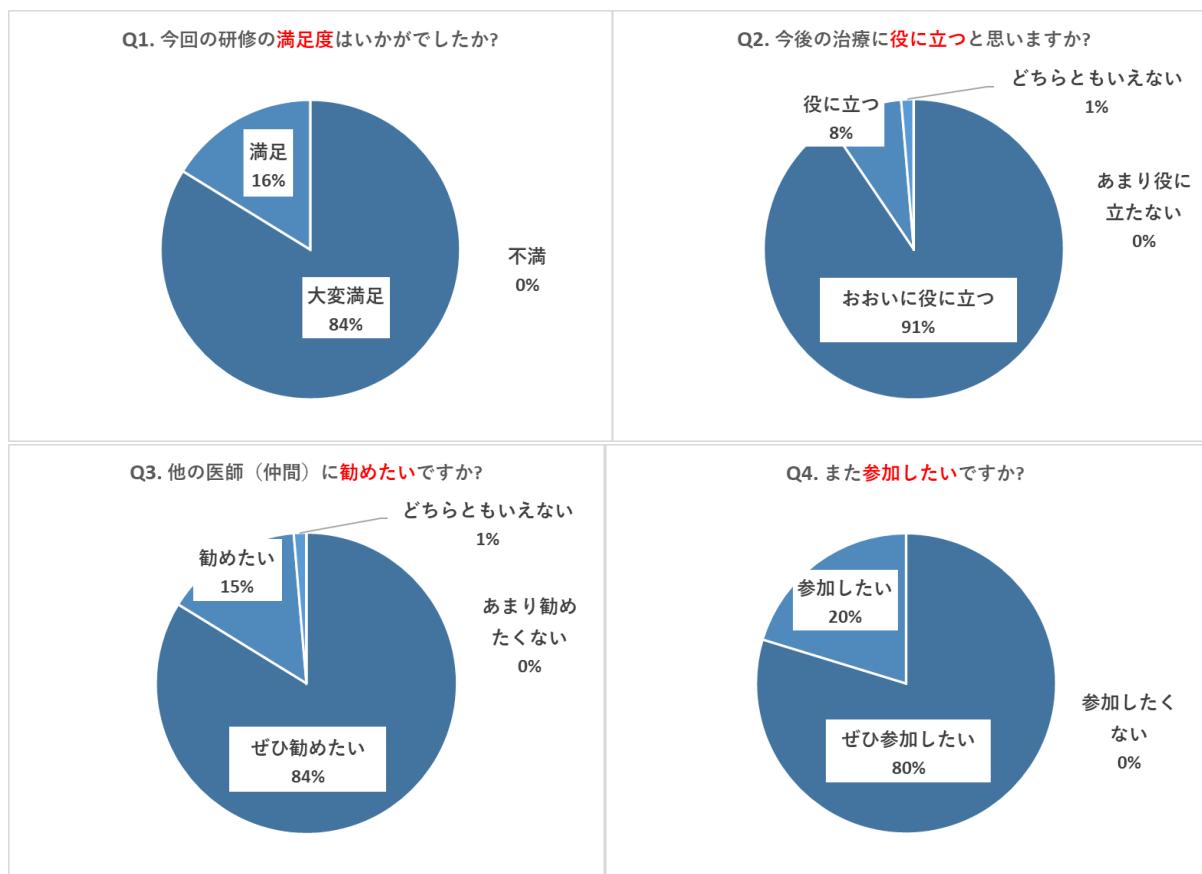
ヘルニアセミナー



産婦人科セミナー

<参加者アンケート（一部抜粋）>

参加者のうち 74 名から回答が得られた。全体として満足度は非常に高い。設備環境については無影灯の導入など、設備整備の余地があると思われた。



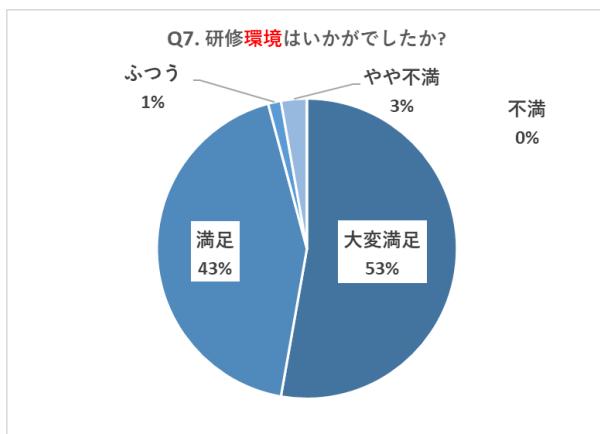
Q5 今回の研修の良かったところを具体的に教えてください。

23 人
18 人
14 人
6 人
3 人
2 人
2 人
1 人

普段行うことのないアプローチができ、解剖の理解を深めることができた
献体の固定状態が実際の状態に近かったため、今後の手術の参考になった
日常の臨床で疑問に思っていた基本的な解剖学的構造を確認することができた
教育内容が良かった（セミナーなど）
少人数の研修だったため、実際に長時間経験できて良かった
講師との1対1の指導が良かった
若手の医師にとって非常に有用なトレーニング機会であった
においが少ない
新しい機器の動作を確認できた

Q6 今回の研修の改善点と今後の研修に期待することを具体的に教えてください。

4人	もっと色々な手技をやりたい
3人	Cアームを導入してほしい
3人	年に数回実施してほしい
2人	もっと細かく手順を組んで研修を行うと良い
2人	生体よりも扱いが難しい部分があった
2人	献体の体格と脂肪の固定具合がもう少し改善できると良い
2人	鋼製小物の不足
1人	屈曲出来る手術台があると良い
1人	ご遺体の数を増やしてほしい
1人	関節が硬い部分があった
1人	モニターの数を増やしてほしい
1人	準備・片付け手順のマニュアル化
1人	無影灯が欲しい
1人	LEDライトのグレードがもう少し高いものがあれば有難い
1人	廃液の処理に苦労した



Q8 ご意見、ご感想、ご要望などを教えてください。

(特に不満に感じたことがあれば、ぜひご記入ください。今後の改善に努めます。)

7人	部屋が暖かく快適であった
4人	部屋が寒かった
2人	継続的に開催してほしい
1人	今後は外部者も含めて見学者を多くしたい
1人	換気が不十分に感じた

等
JR五郎
乗合
星雲

(第三種郵便物認可)

「献体」減る登録者

県内で近年、死後に自らの遺体を提供する「献体」の登録者が減っている。社会環境の変化や新型コロナウイルス禍などの影響で、一般の関心が薄れているためだ。市民の自発的な献体が、医学生や現役医師の知識と技術の習得を支えてきたが、関係者からは「このままではいずれ実習、研修が立ちゆかなくなる」と危ぶむ声が出ている。

医学生 学びに影

献体は医学や歯学の発展に役立てるため、あらかじめ登録した人が自身の遺体を無償で提供する仕組み。浜松医科大(浜松市東区)への献体を希望する登録者がつくる同大白薬会の会員数は、2000年代前半には千人を超えた時期もあったが、現在は582人(6月1日時点)。同大で学生や医師が必要な一定水準の学びを確保するには、年間50体程度の献体が必要という。

同大は献体による解剖実習を1974年の開学後すぐに始めた。今は主に医学部医学科の2年生が、自身の手で初めて人体にメスを入れ、臓器や筋肉、骨格などを実際に自分で見て学ぶ機会にしている。実習を指導する同大器官組織解剖学講座の佐藤康一教授(62)は、「命の重さを知るなど学生が医師へ」と語る。

としての倫理観を育む上でも必要」と話す。学生からは、「貴重な献体をいただいて実習をした以上、必ず良い医師になって社会に貢献しなければ」と感じたといった感想が寄せられている。

現役の外科系医師が技能を高めるために行う手技・手術研修「カダバ・サージカル・トレーニング(CST)」でも献体的重要性が増している。同大は在籍する医師だけでなく、県内の他病院の勤務医にも門戸を開き、22年度は脳神経外科や整形外科などから計376人が参加した。

同大は登録者減少について、学内での新規の登録受け付けを取りやめた時期があり、20年に再開されたものの情報が広まっていない▽コロナ禍でステイホームが叫ばれ、献体にまで人々の関心が向か

にくい時期が続いた▽献体の実行から遺骨が返還されるまでの期間が数年と長く、遺族が埋葬などの見通しを立てづらい」といった複合的な要因が絡んでいるとみる。名古屋大など愛知県内の大学の献体登録の窓口となっている不老会でも、会員数は漸減傾向という。浜松医科大白薬会の佐藤稔会長(79)は「医学も十技術にのみ込

まれる時代になり、患者を人間とも理解できる医師に育つためにも医学生が生身の遺体に向き合う必要性は高まっている」と強調。献体による教育効果の発信や献体の登録実行手続きの分かりやすさを強化し、安定した献体登録の窓口となっている不老会も、会員数を維持していく必要性を指摘する。

▶ 献体を使いCSTに取り組む参加者=浜松市東区の浜松医科大(同大提供)

命の重さ 知る機会

県内 コロナで市民关心低下?

② 子育て家庭支援や子どもの教育など地域の福祉に関する事業

◇子育て家庭を対象とした食材無料配布会（令和5年度浜松市・湖西市後援事業）

農林水産省の政府備蓄米（NPOに無償提供）およびフードバンクふじのくに様より寄贈の食材を、高校生以下の子どものいる子育て世帯へ配布。

- ・第4回食材無料配布会（2023年6月）225名（124家庭）
 - ・第5回食材無料配布会（2024年2月）150名（72家庭）
- 合計で375名（196家庭）に無洗米900kg、食材24箱を配布



サロン会参加者と準備



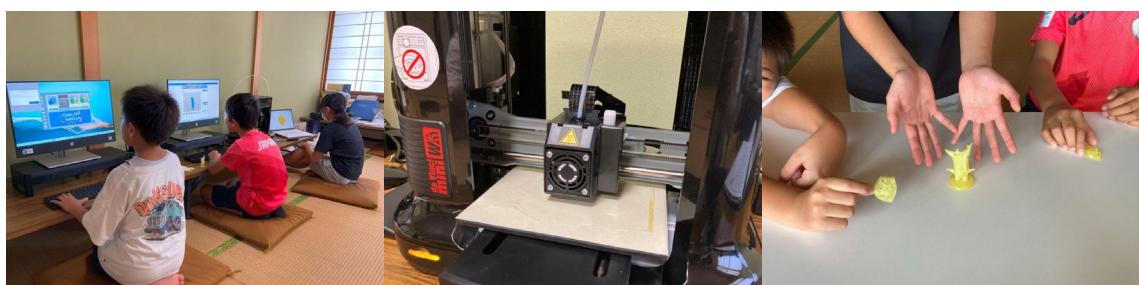
無洗米 900kg



食育資料と共に配布

◇子どもの居場所づくり

浜松市三ヶ日町の研修施設にて通年開催。一般財団法人BNI財団ジャパンの「2023年度助成金（Givers Gain® Grant）」に採択。教育用のPC2台、3Dプリンタ2台を購入。小学生を対象に3Dプリンタ体験イベントを行った。



③ 研修会の開催など全世代を対象とした健康増進に関する事業

◇三ヶ日地域福祉活動

大崎地区民生・児童委員の半田様と2023年8月より毎月第4土曜日に三ヶ日町大崎自治会館にて「みんなのサロン」を開催。高齢者を対象としたスマホ講座やeスポーツ体験会、小学生によるピアノ演奏会などを開催し、延べ187人が参加した。



スマホ講座



100歳のeスポーツ参加



ピアノ演奏会

◇三ヶ日研修施設研究会

三ヶ日町の研修施設おひさまにて研究者・学生・一般市民を対象とした研究会を開催し、国内外から 51 名が参加。



④ 発展途上国支援や難民支援など世界の福祉に関する事業

◇ウクライナ避難民を対象とした健康サポート事業

一昨年度に日本財団の支援事業として実施したウクライナ避難民の健康サポートを浜松医科大学社会貢献事業として継続した。11 件の相談事例に対応し、これらの活動は第 15 回日本プライマリ・ケア連合学会学術大会のシンポジウム「戦争・紛争とプライマリ・ケア～私たちにできること～」にて発表を予定。(令和 6 年 6 月 7 日～9 日開催)

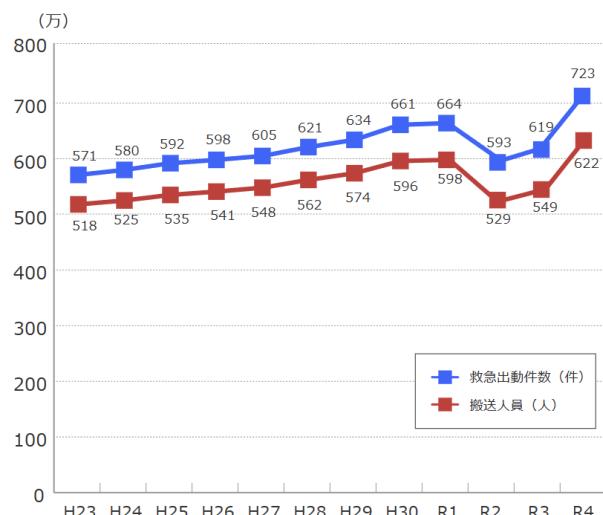


⑤ その他 この法人の目的を達成するための事業

◇救急安心センター事業 (#7119) の県内普及支援

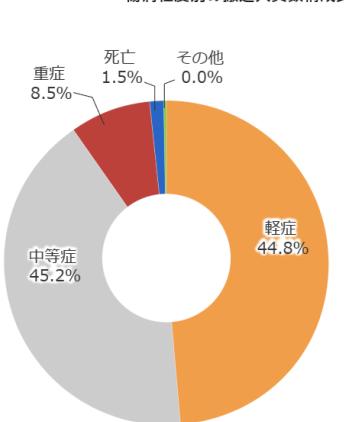
#7119 とは、住民が急な病気やけがをしたときに、「救急車をよんだほうがいいのか」と困った際の相談窓口として専門家から電話でアドバイスができる仕組み。背景に高齢化の進展などに伴う救急需要の増加が挙げられる。

グラフ：救急自動車による救急出動件数・搬送人員の推移



資料：消防庁「令和4年中の救急出動件数等(速報値)」より政府広報室作成。

傷病程度別の搬送人員数構成比



資料：消防庁「令和4年版 救急救助の現況」より政府広報室作成

- ・静岡県における#7119 導入への働きかけ

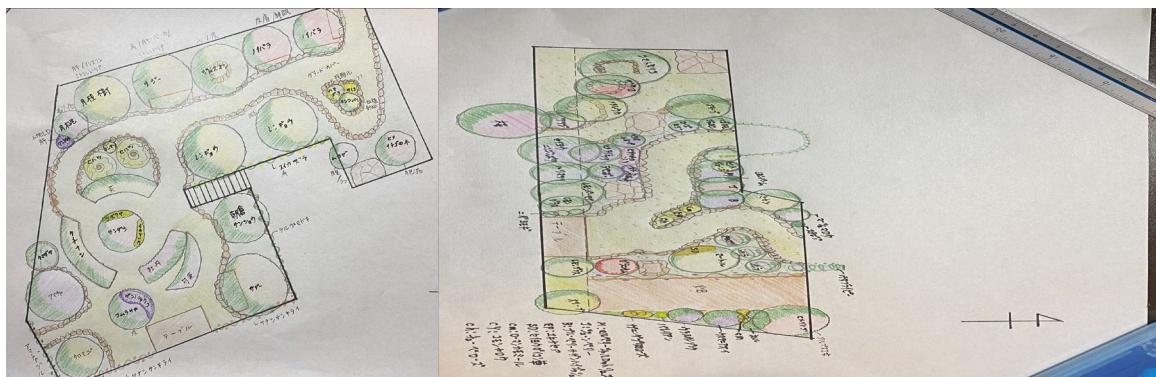
県議会議員の増田享大氏（米田理事のご紹介）より#7119 担当部署である危機管理部を紹介いただき、櫻井課長、酒井部長と数回にわたる面会を行った。令和6年度事業の予算化、公募予定。

◇メディカルガーデン

患者やその家族に対し、生きがいや人とのつながりを含めた健康を自然やコミュニティを通して提供することをコンセプトに活動を開始。自然と健康のつながりを意識できるように薬草や果樹のある庭を造ることも並行して進めている。

活動内容

- ・パーマカルチャーインコースの受講と修了
パーマカルチャーという自然に従った持続可能なガーデンデザインの手法を学習
- ・おひさまの日当たりや植物の調査、土中環境の改良
- ・地域の活動に参加（古民家再生の手伝い）



練習として描いた庭デザイン



土壤に空気が入るように耕す



大崎古民家再生の手伝い